



## タンチョウ博士のお話 (第 32 回)

### タンチョウは舞鶴遊水地にいつから住みついたのか？

むかし、むかし、長沼一帯にたくさんのツルが住んでいました……。

と言っても、この昔ばなしは絵空事や創作物語ではありません。実際にあったお話です。それに、「むかし、むかし」とは言え、せいぜい100年をいくらか越した程度です。おそらく100歳を超える方も町内におられるでしょうから、その方々には、前世紀のことながら今とつながりをもつ現実的なお話と言えるでしょう。

ともかく、この昔ばなしは「……いました」と過去形で語られ、ツルはその後長沼町一帯からいなくなったことを示しています。

しかし、ご存知のように、今世紀になるとツル、つまりタンチョウは再び長沼町へ現われるようになりました。2010年代のことです。特に、2014年からは毎年1羽か2羽が目撃されています。例えば2016年には、おとな(3歳以上の成鳥)と若い鳥(亜成鳥)の2羽組が、ところどころに雪の残る舞鶴遊水地で、愉快そうにダンスをしているのが3月半ばに記録されました。

翌2017年は1羽しか目撃されませんでした。2018年にまた2羽が現れました。今度は亜成鳥と、前年生まれの幼鳥との2羽連れで、2016年に現れた2羽組とは異なる組合せでした。

つまり、もしこれが2016年に現れた組とすると、2018年にはすでに両方とも成鳥になっているはずですから違いは明白です。

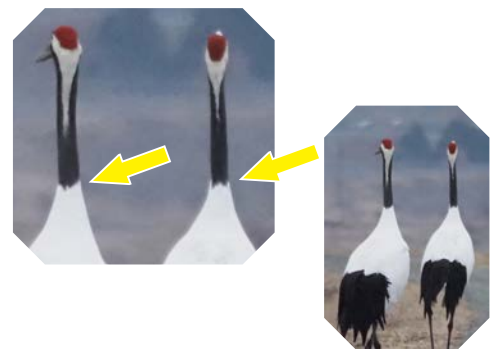
では、2018年の2羽組はその後どうしたのでしょうか。齡上の亜成鳥は遊水地内で換羽後に足を悪くしたりしましたがそれも治り、遊水地やその周辺の農地、さらに舞鶴地区の南にある長都沼などを経て、11月に2羽は姿を消しました。ところが、1羽のタンチョウが遊水地内に残る凍らない水辺にねぐらを構え、越冬したのです。しかしこれも、318と読める足輪がついていて、2羽組のメンバーと違うことがはっきりしています。

さて、翌2019年春、再び2羽のツルが舞鶴地区に現れました。この2羽が前年現れたのと同じかどうか、写真による綿密なボディチェックを行い、同じ組と見て差し支えないと判定されました。判定の手がかりとした体の特徴のひとつ(写真)を示しておきましょう。

その後のチェック作業により、今年の番いも2018年の2羽組と見られています。しかし、個人特有の“人相”のほか判別の手掛かりが多いヒトですら、「そっくりさん」が居ますから、“本人”を証明するもの(免許証とかパスポートなど)が必要です。ましてや“ツル相”(?)の単純なタンチョウでは、“本ツル”(?)証明はさらに難しくなります。

現在は個体識別のため足輪をはめ、それにより寿命を始め、生活状況や社会組織などが少しずつ明らかになっています。ただ、タンチョウは夏に草むらで暮らすため、足輪が草に隠れて見えないことも多いのです。そこで、いったんツルを捕まえ、家畜やイヌ・ネコなみにマイクロチップでも埋め込むとよいかもかもしれません。でもそれには、チップの記号を遠くから読み取る方法を開発する必要がありますし、それよりもタンチョウからは、無理やり捕まえられ、しかも“個ツル”(?)情報の盗用にあたると抗議がくるかも…。(文：正富宏之)

#### 舞鶴の番いの個体を見分ける手がかり(1例)



右がメス、左がオスですが、どこが違うかお分かりですか？

頸の黒い模様くびの下端を見比べてください。  
※この違いは性別を現すものではありません。

撮影：赤間

【問合せ先】役場企画政策係 ☎76-8015